

少年院在院者による施設環境評価

— 日本語版 CIES の検討 —

平田 乃美・渡部 正・渡邊 亮一

(白鷗大学女子短期大学部) (日本大学文理学部) (自治医科大学看護学部)

Moos (1974) は、人間の心理・社会的環境を構成する基本次元として『人間関係』『個人発達』『組織の維持と変化』の3次元を提唱している。米国では既にこの理論に基づく矯正施設の環境評価尺度 CIES が標準化されている。CIES の我が国での実施結果では、「自己表現」「自主性」「カウンセリング」などの下位次元において、尺度構成の過程で構成概念の文化差が示唆されている(平田・浅井, 1997)。そこで本稿では、日本版矯正施設環境評価尺度の作成に向けて、少年院6施設で実施したデータについて数量化Ⅲ類によるCIES構成次元の探索を目的とした構造化分析を行った。その結果、オリジナルな3次元『人間関係』『個人発達』『組織の維持と変化』に対応する「心理的な援助」「実用的な指導」「指導方針の明確さ」の3軸が抽出された。分散分析の結果、各施設それぞれで有意な差が認められた。これらを踏まえて、矯正施設環境評価尺度が今後矯正教育の現場において活用されるために必要な視点について論議した。

キーワード：少年院、矯正施設環境評価尺度、心理尺度、文化差

1. はじめに

近年、教育・福祉等の公共施設・機関では、自己点検評価や第三者機関による評価が導入される動向にある。導入に際しては、物理的環境や内容の異

なる施設・機関で用いることのできる汎用性の高い評価・判断基準、評価方法等についてさまざまな論議がなされている。一方、心理学分野では生活空間（心理・社会的環境）の評価は、従来から取り組まれている。例えば、Moos（1974）らは、四半世紀以上前に学校・職場・病院・軍事施設などの生活環境に対する成員の評価を測定する一連の社会環境評価尺度の標準化を試みている。

これらの尺度では、人間行動に効果をもつ環境の要因が検討される。人間の社会生活における基本的な環境次元として、Moos らは、「人間関係 Relationship dimension」「個人発達 Personal growth dimension」「組織の維持と変化 System maintenance & change dimension」の3次元を提唱している。彼らはこの基本3次元に基づき、学校・職場・病院・軍事施設などの生活環境に対する成員の評価を測定する一連の社会環境評価尺度の標準化を試みている。矯正施設環境については、矯正施設環境評価尺度（CIES: Correctional Institution Environment Scale、以下 CIES と記す）が開発されている。CIES では、3次元各々が次の3領域から構成されている。『人間関係』は「自主的参加」「援助」「自己表現」、『個人発達』は「自主性」「実用指導」「個別指導」、『組織の維持と変化』は「規律と組織化」「規則の明確さ」「教職員の管理」である。合計9領域には各々9～10の質問項目があり、全86項目が測定に用いられる。

こうした国外で標準化された尺度をオリジナルのままの形式で国内で実施する場合、測定する環境の背景にある文化や事情などが異なるため、問題が生じることがある。CIES についても、平田・浅井（1997）が我が国で実施した結果では、信頼性・妥当性にいくつかの課題が報告されている。例えば、「自己表現」領域ではオリジナル尺度の9項目中7項目が言葉による表現についての項目であるが、“話し合い・討論”や“意見交換”など言葉による自己表現についての項目は尺度全体との相関が低く、“感情”“感じている”ことについての項目では相関が高かった。そのため「自己表現」については、感情表現など言語によらない日本人が考える自己表現に関する項目を補足し

て、尺度の再構成を行うのが望ましいことが指摘されている。このように、国外で標準化された尺度の実施に際しては、国内の事情に合わせて測定次元や項目を吟味する必要がある。そこで本稿では、日本の矯正施設環境を測定する独自尺度の作成に向けて、CIES の構成次元を探索的に調べることを目的とした。

2. 方法

2.1. 日本語版 CIES

日本語版 CIES の作成には、Back-translation 法 (Kumata, 1956)、すなわち英語・日本語に精通する Bilingual を通じて、まず英語原版から日本語へ、次に翻訳された日本語を再度英語へと翻訳することで、尺度を構成する項目の含意をできる限り正確に再現することを試みた。さらに、矯正施設関係者および専門家との研究会によって各項目が日本の矯正施設に適切な内容となるよう検討した。

2.2. 調査データ

本稿で分析するデータは、東京矯正管区内の少年院 6 施設（短期 3 施設、長期 3 施設）に在院する男子 276 名、女子 60 名の計 336 名（15 歳～20 歳、平均 17.43 歳）を対象として、1995 年 1 月に実施されたものである。調査時期からの経過年数を鑑みると本データは 2003 年現在の矯正施設環境を示すとはいえないが、CIES の構成次元を探索的に調べるための資料としては十分に活用できると考えられる。回答方法は、質問項目数が多いことから在院生の負担を考慮して「はい」「いいえ」の 2 件法とした。その際、担当教官より在院生に回答は無記名式であり回答内容が成績・処遇に関係することは一切ない旨を説明している。

3. 結果と考察

3.1. CIESの構造分析

矯正施設環境評価尺度 CIES の数量化Ⅲ類による構造分析の結果、第Ⅰ軸～第Ⅲ軸の3軸が得られた (Table 1～3)。そこで、各軸に寄与値の高い項目内容からそれぞれの軸の解釈を行った。

第Ⅰ軸では、+側は「私達生徒は出院する前に計画を立てておかなければなりません (Q77)」「私達生徒は、それぞれの目標を達成することを期待されています (Q59)」、-側は「私達生徒が出院してから何をするかは、あまり重要とされません (Q32)」「この施設では、実生活で役に立つような訓練はあまり重要とされていません (Q86)」などの項目で構成されていたため、第Ⅰ軸は「実用的な指導」に関する軸と解釈された。この軸は、Moos (1974) が人間環境の基本次元として提唱した3次元のうち『個人発達』の次元に対応するものと考えられ、オリジナルの下位次元「実用指導」としても設定されている。第Ⅰ軸20項目の内的整合性を示す KR20値は0.97、20項目と尺度の総得点との相関係数は0.60～0.93であった。

Table 1 第Ⅰ軸「実用的な指導」にウェイトの高い項目とその方向

第Ⅰ軸での項目のウェイトの値							
No	次元	領域	(+)	No	次元	領域	(-)
Q74	人間関係	S	先生は、私達生徒のグループ活動(審社活動 体育レクリエーション・クラブなど)を応援しています	Q6	個人発達	PP0	私達生徒は、個人的な問題について生徒同士相談相手になるよう勧められています
Q77	個人発達	PO	私達生徒は出院する前に、計画を立てておかなければなりません	Q32	個人発達	PO	私達生徒が出院してから何をするかは、あまり重要とされません
Q10	人間関係	I	私達は(更正し)、良い生徒になりたいと思っています	Q5	個人発達	PO	出院するためにはどうしたらよいか計画することは、ここでは重要なことではありません
Q64	人間関係	I	施設では、時々なるほど考えさせられる話し合いがあります	Q16	組織維持	O&O	ディールームは、いつもきちんと整頓されていない
Q53	組織維持	C	私達生徒は、規則を破ったらとうなるか承知しています	Q3	人間関係	E	私達生徒は、自分の感情をあるがままにあらわすように勧められています
Q7	組織維持	O&O	この先生方は、施設をいつもきちんとさせようとしています	Q73	人間関係	I	私達生徒は、先生方に言われるまで自分から進んでは何もしません
Q69	個人発達	PP0	先生方は、私達生徒が自分自身を理解する手助けをしてくれます	Q86	個人発達	PO	この施設では、実生活で役に立つような訓練はあまり重要とされていません
Q75	人間関係	E	この施設の先生方は、きちんと話し合うのは健全なことだと考えています	Q46	人間関係	I	この施設には、地域の人々との交流や社会奉仕のような社会的な活動はほとんどありません
Q59	個人発達	PO	私達生徒は、それぞれの目標を達成することを期待されています	Q38	人間関係	S	私達生徒は、めったにお互い助け合いません
Q48	人間関係	E	この施設では、正しい言葉使いが好まれます	Q82	人間関係	I	ここは、友好的で家族的な雰囲気施設です

(KR20=0.97)

第Ⅱ軸では、+側は「ここは、友好的で家族的な雰囲気施設の施設です (Q82)」「先生方は、私達生徒を助けるためには、ふつうはしなくてもよいことまでしてくれます (Q47)」「私達生徒は、個人的な問題について生徒同士相談相手になるよう勧められています (Q6)」、-側は「私達生徒は、自分達の気持ちを先生方に隠しがちです (Q12)」「先生方は、私達生徒の気持ちを考えるよりも、目の前のもっと現実的な問題を気にかけています (Q41)」などの項目で構成されていたことから、第Ⅱ軸は「心理的な援助」に関する軸と考えられた。これは、人間環境の基本3次元のうち『人間関係』の次元に対応するものと考えられた。「気持ち」や「雰囲気」など主に精神的なサポートに関わる項目で構成されているところが、オリジナルの下位次元「援助」との差異といえる。第Ⅱ軸20項目の KR20値は、0.813であった。また各項目と尺度総得点との相関係数は0.25~0.63であった。

第Ⅲ軸では、+側は「新しい入所者には、誰かが施設内を案内してその仕組みを説明してくれます (Q26)」、-側は「カウンセラー (相談できる先生方) にいつ会えるか、私達生徒は知らされていません (Q71)」「規則に従わない場合、私達生徒は他の施設へ移されます (Q27)」などの項目で構成されており、第Ⅲ軸は「指導方針の明確さ」に関する軸と解釈された。第Ⅲ軸においては20項目の KR20値が0.54と低い値となった。そこで、各質問項目と尺度の総得点の相関係数が0.2以下であった2項目を尺度の内的整合性を脅かす可能性のある項目として削除した。残る18項目の KR20値は0.58であった。また各項目と尺度総得点との相関係数は0.25~0.47であった。第Ⅲ軸は、人間環境の基本3次元のうち『組織の維持と変化』の次元に相当する軸と考えられた。

Table 2 第2軸「心理的な援助」にウェイトの高い項目とその方向

第2軸での項目のウェイトの値							
No	次元	領域	(+)	No	次元	領域	(-)
Q89	組織維持	C	私達生徒は、カウンセラー（相談できる先生方）と会える時間を知っています	Q12	人間関係	E	私達生徒は、自分達の気持ちを先生方に隠しがちです
Q82	人間関係	I	ここは、友好的で家族的な雰囲気施設です	Q66	人間関係	E	この施設で、私達生徒がどんなふうにいるか知るのには難しいです
Q47	人間関係	S	先生方は、私達生徒を助けるためには、ふつうはしなくてもよいことまでしてくれます	Q28	人間関係	I	この施設では、グループ同士の一体感を感じられません
Q29	人間関係	S	この施設では、人間的に成長した人が自分より成長していない人の面倒を見ています	Q31	個人発達	A	ここでの生活の仕方について、できれば変えてほしい点があります
Q6	人間関係	PPO	私達生徒は、個人的な問題について生徒同士相談相手になるよう勧められています	Q87	個人発達	PPO	この施設で、生徒は個人的な問題について隠し隠てなく話し合うことはできません
Q83	人間関係	S	先生方は私達生徒のしたいことを知っています	Q43	組織維持	O&O	この施設では、時々まとまりが乱れることがあります
Q30	人間関係	E	私達生徒は、ここで何を考えているか本当のことを話し合います	Q62	組織維持	C	この施設の生徒は、考えをいつもこころろ変えます
Q39	人間関係	E	私達生徒は、カウンセラー（相談できる先生方）に何でも話します	Q22	個人発達	A	私達生徒が責任の重い重要な事務を先生方から任せられることは、ほとんどありません
Q1	人間関係	I	私達生徒は、この施設を誇りに感じています	Q41	個人発達	PO	先生方は、私達生徒の気持ちを考えるよりも、目の前のもっと現実的な問題を気にかけています
Q24	人間関係	PPO	個人的な相談を、みんなと話すことができます	Q25	組織維持	O&O	この施設はいつも、少し汚れています

(KR20=081)

Table 3 第3軸「指導方針の明確さ」にウェイトの高い項目とその方向

第3軸での項目のウェイトの値							
No	次元	領域	(+)	No	次元	領域	(-)
Q26	組織維持	C	新しい入所者には、誰かが施設内を案内してその仕組みを説明してくれます	Q28	人間関係	I	この施設では、グループ同士の一体感を感じられません
Q25	組織維持	O&O	この施設はいつも、少し汚れています	Q88	組織維持	O&O	先生方との約束で、私達生徒が時間を待たされることはめったにありません
Q81	組織維持	SC	私達生徒は、先生方に親しく話しかけてもかまいません	Q71	組織維持	C	カウンセラー（相談できる先生方）について会えるか、私達生徒は知らされていません
Q33	人間関係	PPO	この施設では、個人的な問題の理解が重要な話題にされています	Q22	個人発達	A	私達生徒が責任の重い重要な事務を先生方から任せられることは、ほとんどありません
Q70	組織維持	O&O	カウンセラー（相談できる先生方）は、時々私達生徒との面接の約束を守れないことがあります	Q1	人間関係	I	私達生徒は、この施設を誇りに感じています
Q24	人間関係	PPO	個人的な相談を、みんなと話すことができます	Q15	人間関係	PPO	私達生徒は、個人的な問題について他の生徒たちとほとんど話し合いません
Q62	組織維持	C	この施設の生徒は、考えをいつもこころろ変えます	Q40	個人発達	A	先生方を批判してはいけません
Q47	人間関係	S	先生方は、私達生徒を助けるためには、ふつうはしなくてもよいことまでしてくれます	Q27	組織維持	SC	規則に従わない場合、私達生徒は他の施設へ移されます
Q18	組織維持	SC	先生方の批判をする生徒もいます	Q78	個人発達	PPO	私達生徒は、性の話題についてほとんど話し合ったことがありません

(KR20=058)

3. 2. 第 I 軸～第 III 軸におけるサンプルスコア

本稿の目的は、CIES の構成次元の探索である。そのため、ここでは施設別の結果について述べるに留め、各施設の特徴などを踏まえた解釈については言及しない。

まず、長期施設と短期施設の比較結果については、在院生の短期・長期別の第 I 軸～第 III 軸上でのサンプルスコアの平均値を算出して、処遇（長期・短期）を要因とした一要因分散分析を行った。その結果、第 I 軸～第 II 軸において有意傾向（ $F[1,323]=3.19, p<.075$ 、 $F[1,323]=3.03, p<.083$ ）は認められたものの、在院生のスコアに処遇の要因による有意な差は認められなかった。次に、施設別の在院生の第 I 軸～第 III 軸上でのサンプルスコアの平均値では、施設ごとに有意な差異が認められた（Fig. 1 参照）。なお、Fig. 2 は第 I 軸を X 軸・第 II 軸を Y 軸、Fig. 3 は第 I 軸を X 軸・第 III 軸を Y 軸として、施設別在院生のサンプルスコアを座標軸上にプロットしたものである。これらの結果は、処遇（長期・短期）よりも、各施設ごとの特色が反映された結果と考えられた。

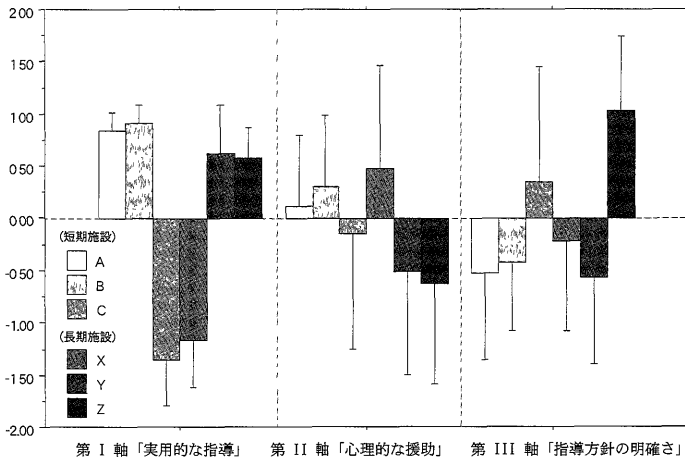


Figure 1. 施設別のサンプルスコア平均値

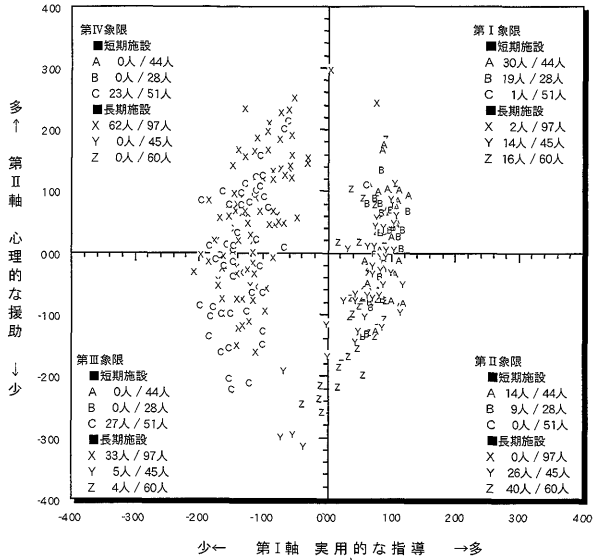


Figure 2. 各施設在院生の第I軸・第II軸上の分布

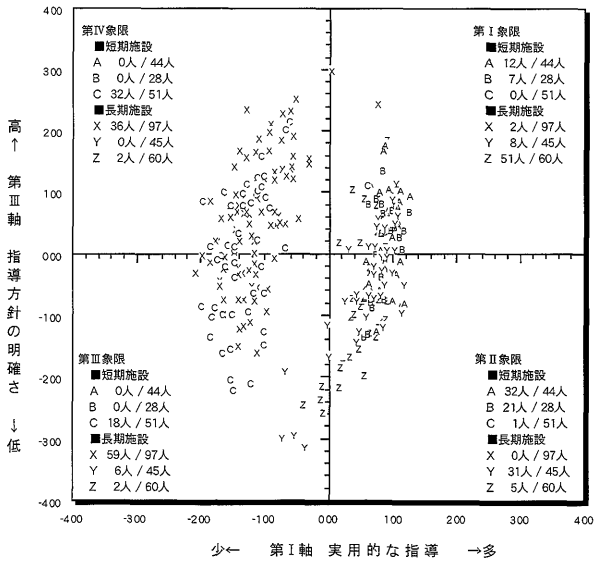


Figure 3. 各施設在院生の第I軸・第III軸上の分布

4. おわりに

本稿の目的は、日本で実施された矯正施設環境評価尺度 CIES の構成次元を探索的に調べることにあった。分析の結果、人間が社会生活を営む基本環境として Moos (1974) らが提唱した『人間関係』『個人発達』『組織の維持と変化』に各々相当する 3次元「心理的な援助」「実用的な指導」「指導方針の明確さ」が抽出された。今回分析に用いたデータは実施時期や回答方式に限界があったものの、米国で標準化されたオリジナルの 3次元がわが国においても抽出されたことは意義があるといえる。今後は、抽出された 3次元を基本として、下位次元(領域)や項目を新たに設定して尺度を構成する必要がある。さらには、在院生の施設環境認知に効果をもつ個人特性についても要因を検討する必要がある。

心理学分野における環境研究(環境認知、行動場面、空間認知など)は、戦後の都市再開発に端を発して主に1970年代中心に発展を遂げた(Stokols, 1995)。いわゆる環境行動研究は、建築学・社会学・生態学などをはじめとする諸研究との学際領域として、人間の生活空間の改善や問題解決をめざす応用心理学といえる。そのため、本研究のような質問紙等を用いた環境認知研究の成果は、教育者や管理・運営者自身が極力簡易に実施して環境操作にフィードバックできるツールとなることが望ましい。こうした実用性重視の視点と、心理学研究の特徴である測定の科学的厳密性を重視する視点の双方をクリアすることが、心理尺度を用いた環境認知研究が直面している課題といえるだろう。

5. 参考文献

Asai, M., & Hirata, S. (1997) Socio-psychological Environments of Japanese Schools as Perceived by School Students. In Wapner, S., Demick, J., Yamamoto, T., & Takahashi, T. (Eds.), Handbook of Japan-United States Environment-Behavior Research Toward a Transactional Approach. Plenum Press, New York. pp261-271.

- Fraser, B. J. (1991) Two decades of classroom environment research. *Educational Environments: Evaluation, Antecedents and Consequences*. Oxford: Pergamon Press. pp3-27.
- Gump, P.V. (1980) The school as a social situation. *Annual Review of Psychology*, 31, pp553-582.
- Hirata, S., Fisher, D.L., & Fraser, B. J. (2001) Students and Teachers' Perception toward Actual and Preferred Classroom Environment in Japanese Junior-High School. Paper presented at Annual Meeting of the American Educational Research Association (AERA), Seattle, U.S.A. in April 2001.
- 平田乃美・渡部正・相馬一郎 (1998) 非行少年の学校環境認知とローカス・オブ・コントロール 犯罪心理学研究, 36 (2) pp1-18.
- 平田乃美・浅井正昭 (1997) 少年院と一般高校の生徒の社会的環境認知の比較 人間・環境学会誌: MERA Journal, 3(2), pp13-21.
- 厚生労働省ホームページ (<http://www.mhlw.go.jp/shingi/0112/txt/sl207-6.txt>) 「第6回児童福祉施設等評価基準検討委員会議事次第 (01/12/07)」
- Kumata, H. and Schramm, W.A. (1956) A pilot study of cross-cultural methodology. *Public Opinion Quarterly* 20.
- Moos, R. H. (1974, 1987) Correctional institution environment scale: Manual. Consulting Psychologists Press. Palo Alto, Calif.
- 佐藤和夫・橘偉仁・藤野京子・藤原正・土持三郎・森田祥一 (1995) 少年院在院者の職員に対する認知に関する研究 (その2) - 職員の指示を守る理由等との関係について - 中央研究所紀要第5号, pp1-23.
- 佐藤和夫・橘偉仁・藤野京子・藤原正・土持三郎・森田祥一 (1994) 少年院在院者の職員に対する認知に関する研究 (その1) - 少年院の職員のイメージと保護者や学校の教師のイメージとの比較研究 - 中央研究所紀要第4号, pp59-79.
- Stokols, D. (1990) Instrumental and spiritual views of people-

- environment relations. *American Psychologist*, 45. pp641-646.
- Stokols, D. (1995) The paradox of environmental psychology. *American Psychologist*.
- 渡部正・平田乃美 (1997) 非行中学生の学校環境認知に関する心理学的研究
— 学校適応及び家庭環境との関連を中心として — *日本大学心理学研究*, 18. pp1-11.

付記

本調査データの分析は、平成15年度文部科学省科学研究費補助金若手研究 (B)「非行少年の個性理解と早期指導に役立つ学級環境尺度の開発 (課題番号 15730385 研究代表者：平田乃美)」の助成を受けて行われた。

謝辞

早稲田大学人間科学部 佐古順彦教授、同人間科学部長 野嶋栄一郎教授の各科研費研究に分担者として参加させて戴いた経験が本研究につながりました。記して感謝申し上げます。

Evaluations of Correctional Institution Residents toward Their Institution Environment:

For Constructing Japanese version of
Correctional Institution Environment Scale

Sonomi Hirata* Tadashi Watanabe** Ryoichi Watanabe***

Abstract

According to Moos's (1974) schema, there are three basic types of dimension for classifying socio-psychological human environment. These three dimensions are Relationship Dimension, Personal Growth Dimension, and System Maintenance and System Change Dimension. The correctional institution environment scale: CIES is one of Social Environment Scales developed by Moos. In a recent paper, Hirata & Asai (1997) administered the CIES to the residents in Japanese correctional institutions, then found cultural differences between Japan and the US on some sub-scales; Expressiveness and Personal Problem Orientation. This present study therefore aimed to investigate the scale construction of Japanese version of CIES. Via Multi-dimensional Quantification III Analysis, the three axes accounted for by Japanese residents were (1) Mental Support, (2) Practical Orientation, and (3) Rule Clarity. The result showed that all of our three sub-scales agree with those advocated by Moos's schema. Finally, based on these findings, the point of view was discussed to modify the sub-scales and the items for constructing the correctional institution environment scale for Japanese correctional institutions.

Keywords : Correctional Institution, Correctional Institution Environment Scale, Psychological measurement, Cultural differences

* Hakuoh University Women's College

** Nihon University

*** Jichi Medical School